

平成 22 年 4 月 1 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19592469

研究課題名（和文）

看護教育における模擬患者養成プログラムの開発

研究課題名（英文）

Development of the simulated patient training program in nursing education

研究代表者

清水 裕子 (SHIMIZU HIROKO)

香川大学・医学部・教授・

研究者番号：10360314

研究成果の概要（和文）：

国内看護学研究における模擬患者の定義を整理し、海外における看護学模擬患者の養成状況を調査して、看護学における模擬患者の養成課題を明らかにした。模擬患者にもとめられる能力は、患者らしさを失わない態度とフィードバック能力であった。この課題を解決するために、市民模擬患者に対して、学生を理解するための実習前学生との対話プログラムと不安軽減のための役割支援プログラムを作成し実施した。

研究成果の概要（英文）：

The definition of the simulated patient in nursing research was clarified, overseas training using simulated patients was investigated, and issues involving simulated patient training in nursing were identified. Two capabilities required of the simulated patient were a patient-like attitude and feedback capability. In order to address these issues, for citizen simulation patients a dialog program with the student before clinical study for understanding students, and a role support program to reduce uneasiness were created and implemented.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：模擬患者 模擬患者参加型学習 養成プログラム 看護教育

1. 研究開始当初の背景

我が国の看護教育では、今後ますます基

礎教育における技術習得の重要性が増している。看護技術教育は、患者への対応や技術が、安全に、安楽に提供することを保

証しなければならない。模擬患者教育は、学内で、より臨場感のあるシミュレーション教育を行う上で画期的な方法である。

我が国での模擬患者の導入は、1970年代日野原重明氏のライフプランニングセンターでの紹介に始まり、1984年の植村研一氏の医学教育における実践報告などから活用が本格化した。看護教育で活用する模擬患者は、これまでに養成された医学用や市民団体の模擬患者で活用されている現状である。また、技術教育では、看護教員がその役割を行うこともある。看護教育者によって独自に、目的に合った養成ができれば、模擬患者の活用はさらに促進されるのではないかと考えられる。そこで、模擬患者の養成を行うには、看護教育用の模擬患者養成プログラムを開発する必要がある。

2. 研究の目的

- 1) 看護教育に活用される模擬患者を分類整理し、その特徴を明らかにする。
- 2) 看護学に活用される模擬患者に必要な能力を明らかにする。
- 3) 養成プログラムを作成実施し、その効果を検討する。

3. 研究の方法

- 1) 国内における看護研究論文の過去の題目のテキストを収集し、テキスト解析ソフトウェアマイナーにて、頻度における解析を行い、模擬患者の概念を整理し、定義を明らかにする。
- 2) 海外における看護学模擬患者の文献調査により定式化された養成プログラムの存在を探索し、その実態を明らかにする。
- 3) 専門機関養成のSPに調査協力を依頼し、演技を撮影し、画像データ解析ソフトを用いて解析し、模擬患者の特徴を明らかにする。
- 4) OSCEで、教員模擬患者の評価をうけた学生の実習後追跡の質問紙調査を行い、多変量解析により模擬患者に期待されるフィードバック能力の重要性を明らかにする。
- 5) 模擬患者養成の最初の段階として、シルバー人材センターの市民の協力を得て、演技対象者である学生との交流経験を実施し、その効果を検討する。
- 6) 模擬患者養成の最後の段階において、役割課題を学習するプログラムを実施し、その効果を測定する。

7) これまでの模擬患者に関する研究を公表し、国内の研究者の評価をうける。

8) 模擬患者を特徴づける要素を明らかにし、養成過程の最初と最後の段階での課題をまとめる。

4. 研究成果

1) 国内における看護研究論文の題目テキストを分析した。テキストは、模擬患者と擬似体験、患者体験、モデル、紙上患者、ロールプレイ、CAI、その他、対象外に分類された。これを模擬患者の人的特徴を明らかにするために、患者シミュレーションの水準が類似のものを再度6つカテゴリー（模擬患者、擬似体験、患者体験、紙上患者・モデル・CAI、ロールプレイ、その他・対象外）に分けた。「模擬患者」の概念は、ペーパーペイシエント（紙上患者）、シミュレーターモデル（モデル）なども模擬患者と呼ばれており、バローズ由来の訓練された健康な市民であり、病状を表現する人を必ずしも表現してこなかったことが明らかになった。しかし、本調査の結果を公表することで、国内的な合意を促進することに貢献できたのではないかと考える。

2) 海外における看護学模擬患者の文献調査により定式化された養成プログラムの存在を探索し、対象としたデータベースは2001年から2008年のpub medであり、standardized patient、nursing student、coaching/training program、stimulated patient、nursing studentをキーワードとして抽出した。そのうち、SPが演じたシナリオが具体的に提示されているもの16件を検討した。英語圏の論文が殆どであったが、スタンダードな養成方法はなかった。養成は、市民や役者、職員など様々であるが、各大学や教育機関で独自な方法を実施していることがわかった。しかし、要素毎に類型化するなど、養成における体系的な手順も示されていないことがわかった。

3) 専門機関養成のSPの演技を撮影し、ベテラン看護師と学生に対応する対話演技において、SPがどのような役割を演じているかを分析した。分析は、行動コーディングシステム Behavior Analysis (KK DKH 製) を使用し、非言語的コミュニケーションの手がかりとかかわり技法の出現状況を解析した。解析の方法は、動画を観察しながら出現状況をプロットし、ローデータを作

成した。行動の出現状況が回数と時間で記述された。このデータから、同時生起性と2事象の事象連鎖を解析した。その結果、SPは、相手がベテランであっても不慣れであっても、常時患者らしさを失わない様相と対話を演じており、患者らしさの表現が特徴であることがわかった。

4) 課題をバイタルサインズ(脈拍・血圧測定)、感覚器(視力・聴力・神経系のいずれかの一つ)のフィジカルアセスメント、応答能力としたOSCEにおいて、教員模擬患者のフィードバックをうけた学生の実習後追跡の質問紙調査を行い検討した。質問紙調査(表1)を行った。質問は基本属性の他、7件法の10項目、評定法2項目、1項目は自由記述であった。模擬患者が看護学生にフィードバックする内容は、看護学生の課題認識を高めることであるが、教員と市民模擬患者に同様のフィードバックを期待することは難しいかもしれない。教育目標に応じて求められるフィードバックが提供できることが重要である。したがって、市民模擬患者であれば、対象の看護学生をより理解していることが重要であると考えられる。その時期は、看護学生が実習に行く前に市民模擬患者と看護学生の理解を深める機会が得られることが必要であることがわかった。

5) 模擬患者養成の最初の段階として学生を理解するプログラムが必要ではないかと仮説を立て、シルバー人材センターの市民の協力を得て、学生との交流経験を実施し、その効果を検討した。調査協力者は、都内A区シルバー人材センターに登録し、65歳以上で草取り作業などに従事している比較的健康な男性11名、女性9名の合計20名、年齢は64歳から82歳までで平均年齢72.21(±4.34)歳、学生は23名であった。基本属性は、全て東京在住で、配偶者は有り17(85%)、無しが3(15%)、同居者は配偶者同居が17(85%)、未婚の子との同居が7(35%)、既婚の子供家族との同居が1(5%)、独居が1名であった。現在、病気や症状の訴え7名、手術などの治療経験7名、服薬中8名であった。その結果、この対話研修では、市民模擬患者にOSCEなどの役割課題がなく、学生との対話のみを目的とした。それゆえ市民模擬患者は不安なく、異世代の考え、医療に対する要望、患者の要望などを伝え、率直な患者の心理を表明した。これは市民模擬患者と学生の相

互理解が深まったことを意味している。つまり、模擬患者は不安なく学生と対話する場合、人生経験から得た内的過程について、その人格的存在を通して明確に伝えることができる。市民は学生の生の声を聞き、学生の内面を理解することができたと考えられた。

6) 模擬患者養成の最後の段階において、役割課題を学習するプログラムを実施し、その効果を検討した。調査対象者は、A看護大学模擬患者養成過程にある男性10名、女性24名、不明1名であった。年齢は20代から80代までで、50代が最も多く86%、40代が31%と次いで多かった。支援プログラムは、1年間の養成講座の最終段階にあり実施前に行う講義の位置づけである。この支援プログラムのテーマは、看護教育における模擬患者の役割で、内容は、模擬患者の役割や看護教育における模擬患者の必要性、OSCEや模擬患者参加型授業について解説を行うものである。具体的には、模擬患者参加型学習、看護師-患者役割、リアリティーとシミュレーション、思考と感情、模擬患者のイメージ・演技力・フィードバック力・利点欠点、役割課題、看護教育者の役割などである。調査方法は、質問紙調査を行った。質問項目は、性別年齢の他、5件法による理解度、学習必要度、役割理解度、役割期待理解度、不安度であった。支援プログラムは、理解度平均3.23±1.33、学習必要度平均4.89±0.33、役割理解平均4.29±0.52、役割期待理解度平均4.32±0.54、不安度平均3.63±1.11であった。概ね支援プログラムは看護教育における模擬患者の役割を学習可能なプログラムであることがわかった。また、模擬患者養成過程にある模擬患者の不安が、役割理解などがどのように影響を及ぼしているかについて、重回帰分析を行った。今回の調査から、模擬患者は講座を受講して時間がたつと不安は軽減していくが、役割を明らかにできる支援プログラムは重要であり、今回の支援プログラムが、役割課題や役割期待について説明力を持つプログラムであったことを明らかにした。

7) 看護学における模擬患者の活用方法について、「看護展望」に年間を通して連載を行って、これまでの研究内容を公表し、国内の研究者の評価をうけた。

8)看護学模擬患者の養成においては、学生を理解するプログラムと患者らしさを表現できる役割課題を学習することが、養成の必要な要素であった。本研究で明らかにした模擬患者養成プログラムは、自校養成や専門機関養成の on the job training に併用可能なプログラムであることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 11 件)

1) 清水裕子：模擬患者を用いた看護教育の現状 模擬患者の定義と活用の意義, 看護展望, 34(1), 68-70, 2009.

2) 清水裕子：看護学におけるシミュレーション教材の種類, 看護展望, 34(3), 72-75, 2009.

3) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用カリキュラムの段階ごとの模擬患者活用①; 1 年次, 看護展望, 34(4), 72-75, 2009.

4) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用カリキュラムの段階ごとの模擬患者活用②; 看護基礎教育 2 年次-診療援助技術の SP 参加型演習などに焦点をあてて, 看護展望 34(5), 69-71, 2009.

5) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用カリキュラムの段階ごとの模擬患者活用③; 看護基礎教育 3 年次, 看護展望, 34(6), 69-71, 2009.

6) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用カリキュラムの段階ごとの模擬患者活用④; 看護基礎教育 4 年次, 看護展望, 34(7), 66-68, 2009.

7) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用看護学における模擬患者活用の工夫と実施方法-目的別模擬患者参加型学習, 看護展望, 34(9), 69-72, 2009.

8) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用模擬患者の特徴と評価, 看護展望, 34(10), 63-67, 2009.

9) 清水裕子・鈴木玲子：看護教育への模擬患者活用 模擬患者の養成; 自校養成と専門機関養成の課題, 看護展望, 34(11), 69-73, 2009.

10) 清水裕子：看護教育への模擬患者活用 模擬患者参加型学習の展望, 看護展望, 34(12), 62-66, 2009.

11) 清水裕子・横井郁子・梅村美代志・他, 看護教育における模擬患者 (SP; Simulated Patient・Standardized Patient) に関する研究の特徴 (論文) 日本保健科学学会誌 10(4), 215-223, 2008.

[学会発表] (計 2 件)

1) 清水裕子：市民模擬患者養成における看護学生との対話研修の意義, 日本看護研究学会中国・四国地方会 第 23 回学術集会抄録集, 35, 2010. 3. 7, 高松市 (香川大学).

2) 清水裕子・内藤明子・小坂裕佳子・勝野とわ子：高齢者看護学における実習前看護実践能力試験の効果に影響する要因, 日本看護学教育学会第 18 回学術集会講演集, 169, 2008. 8. 1-2, つくば市 (筑波大学).

[その他]

ホームページ等

1) 清水裕子・小山恵子：学研メディカル出版事業部主催学研ナーシングセミナー, 認知症の理解とコミュニケーション技法& ケアの実践における模擬患者参加型学習の実施, 2009. 8. 9, 富士ソフトアキバプラザ, 東京,
<http://kurasse.jp/member/nursing/note/177509>

2) 清水裕子・峠哲男：学研メディカル出版事業部主催学研ナーシングセミナー, 認知症の理解とコミュニケーション技法& ケアの実践における模擬患者参加型学習の実施, 2009. 11. 3, 大阪国際会議場, 大阪.
<http://kurasse.jp/member/nursing/note/177509>

3) 清水裕子: 課題番号: 19592469 科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書, 看護教育における模擬患者養成プログラムの開発, 1-106, 2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 裕子 (SIMIZU HIROKO)

香川大学・医学部・教授

研究者番号: 10360314

(2) 研究分担者 (平成 19-20 年度)

横井 郁子 (YOKOI IKUKO)

東邦大学・医学部・教授

研究者番号: 90320671